—英国における標準英語とその変化—

上　條　雅　子

はじめに

今日，英語は国際補助語として世界で広く使用されている。この論文では，英国における標準英語の概念とその変化についての考察を，英語圏の標準英語および国際補助語としての英語との関連で試みる。まず，英国における標準英語に関して，1988年教育法に指示されている標準英語および現在英国社会において認識され，使用されている標準英語の現状を把握し，この背景として標準英語の成立過程を階級および地域との関連で概観する。第2に，英語圏の標準英語として，アメリカ英語，オーストラリアの英語並びにニュージランド英語について概観する。

第3に，国際補助語としての標準英語の定義および（標準英語の）言語的解釈としての標準語について考察する。最後に，国際補助語として世界における多くの諸国の学校教育で教えられ，政治・経済分野においても使用されている英国の英語から派生した英語の現状を概観し，国際補助語としての英語の現状および将来を展望することにより，英国における標準英語の概念と変化を明確にする。

Ⅰ．英国における標準英語

1．学校教育における標準英語

1988年までイングランドとウエルズのステート・スクール（公立高校）における英語の書き言葉は標準英語（Standard English）であり，話し言葉は標準英語を容認発音（Received Pronunciation, 略してRP）で話すことが，慣習的に「正しい」英語とされてきた。しかしながら，1988年の教育改革により，書き言葉は従来通りの標準英語であるが，話し言葉（Spoken Standard English）はRPでなくとも，多様な発音で表現できることになった（DFE, p. 3)。教育令はステート・スクール（公立学校）にのみ適用され，独立校（私立学校）には適用されない。従って独立校における英語は従来通り標準英語とRPである。

標準英語とは，語彙，文法・スペリング・句読点の規則と慣習による英語であり，他の英語，例えば米語などの形態と区別される。標準英語における文法の特長は，代名詞，副詞，形容詞がどのように使用され，否定，質問，動詞の時制がいかに形成されるべきかなどを含み，他の英語の文法の特長と識別される。標準英語は書く英語の形態のみでなく，話す英語にも表現する（DFE, p. 3)。つまり，標準英語は話し言葉にも適用されるが，アクセントは，例えば米語の発音でもよいということである。これは話すことはスピーチの自然さと自発性，会話の機能に関連し，書かれた文章は話されたものより永久的であるために，文章は注意深く構成されており，スピーチより即答の依存が少ないという，話すことと書くことの形態の違いによる（DFE, p. 3)。

2．社会における容認標準英語

イギリスにおいて，母（国）語話者（native speaker）の話す英語によって，聞き手は話手の属する階級，出身地の方言，教育背景などが把握できるという（J. Cooper, Class, 1979)。これは，「正しい」英語が容認された標準英語をRPで話すとする，英語の歴史的背景に起因する。

標準英語

標準英語は社会の変化につれて変わる。14世

紀頃，イギリスには北部（Northern），西中部（West Midland），東中部（East Midland），南部（Southern），ケント（Kentish）などの方言があった。１４世紀後半期から政治・経済の中心であった首都ロンドンを軸として使われていた東南部の階級方言（class dialect）であるロンドン英語（London English）が標準語としての地位を確保し，標準語となった（田中, p.153）。特に，ケンブリッジ大学やオックスフォード大学出身者の話す英語は「容認標準英語」（Received Standard English），その発音はRP（Received Pronunciation）「容認発音」と呼ばれるが，これは全英に共通の英語ではない（田中，1988, p. 629）。

容認発音

地方方言（regional dialect）的色彩がなく，英語が話されているところではどこでも広く受け入れられる発音として，イギリスの音声学者ダニエル・ジョーンズ（Daniel Jones, 1881~1967）が『英語発音辞典』「English Pronouncing Dictionary, 1917」に収録したイギリス発音がRPである。ジョーンズはこの発音を南部出身でパブリック・スクールと呼称される特権グループの私立で教育を受けた，ロンドンを中心とする上流階級に属する人々から採集し，英語発音辞典に収録した。当初，パブリック・スクール発音（Public School Pronunciation, PSP）と称したが，その後採集の条件や範囲などを修正して，容認発音とした。この発音は一種の階級方言（class dialect）の発音で，他の方言より優れてはいないが，教養ある人々の発音として一応標準的発音と認められている（田中，1988, p. 549）。

BBC英語

BBC（British Broadcasting Corporation）「イギリス放送協会」は1920年に，容認発音を放送の標準英語として採用した。容認発音とBBC英語は一般に同じであると見られているが，BBC英語にも容認発音にも，地域的，さらに世代による変化が生じている。

修正標準語

「容認標準語」は社会の変化に伴い，また地方方言（regional dialect）や社会方言（social dialect）などの影響を受けて「修正標準語」（Modified Standard）に変容している。標準英語は18世紀末以後固定化され，その後標準英語の形にほとんど変化はなかったが，社会状況での使われ方は変化し続けた。イギリスでは標準英語と容認発音についての古い思い込みが維持され，学校と大学では書き言葉標準語を扱い，話し言葉の研究がRPの発音を越えることはまれである。世界中で英語が使い続けられていることが，英語教育の分野におけるイギリス英語とRPの現代における支えになっており，これは言語帝国主義と攻撃されてきた（Knowles, p. 192）。しかしながら，主としてメディア，マルチメディア，言語テクノロジーで使用される英語の影響によって，容認標準語は変化している。

話しことばのスタイル

BBCの初期の放送者は主として演説と朗読のためにRPを使用したが，聴衆者に話しかける技能を必要としたことと，放送は最初から国際的であって，英語を話す世界全体でRP以外の発音を使っても成功していた。イングランドでは，ニュース解説以外の放送番組で，また1960年代には地方放送や音楽番組にRP以外の発音が使われ始めた。1990年代半ばにイングランドでは放送に世界中の英語が使用できたが，重要な記録とみなされる番組では今日でもRPが使用されている。BBCの言語顧問でロンドン大学音声学教授であったリロイド・ジェームズ（Lloyd James）は，RPの発音の音声形態と話す技術を混同したが，この混同は生き続けている（Knowles, p. 194）。

マスメディア，コンピュータ，言語テクノロジー

アメリカ映画によるアメリカ英語の影響に続いて，1980年代以来オーストラリアの連続ドラマの成功によるオーストラリア英語の影響など，商業的成功による言語のイギリス英語への影響は著しい。コンピュータで使用される言語も言語テキストの大集積であるコーパス（Corpus）

もアメリカ英語であり，伝統的なイギリス階級制度の威信が消失していると同時に，RP使用者が人口の３％であれば古い社会的価値は無意味で不適切であるという（Knowles, p. 198）。

河口域英語

イングランド南東部では，アクセントの性質がロンドンの民衆の話し言葉から取られた，河口域英語（Estuary English）と呼ばれている新しい種類の英語の発音が認められている（Knowles, p. 195）。例えば，waterの[t]に代わる声門閉鎖音の使用である。河口域英語は都市方言がその都市周辺に広がる過程と同様であり，使用者はそのアクセントを維持してRPに移行しない。河口域英語は上層階級に移動したい若者，自力で出世し政府から利益を得ている人々と関連がある。この英語を使用する人々の層は政治家，大学関係者，労働組合の指導者と多様で，単一のグループではないことは，マスメディアの影響に他ならない。

3. 英語の歴史

1) 近代標準英語

18世紀末までには，標準英語がその世紀の価値によって形成され，多少とも現代の形にほぼ固定した（Knowles, p. 151）。

古英語（Old English）アングル・サクソンの英語

ローマ軍団（43BC~410）がブリテンを去り，6世紀にイングランドを征服したアングル・サクソン人の英語が，それまで大多数の住民が話していたケルト語に取って代わったが，ローマ軍団が去った後数年間ラテン語は少なくとも公用語（official language）に用いられた。787年，デーン人の侵入と定住により多くの古ノルド語（Old Norse）が英語，特に北部方言に借用された。統一されたイングランドで，10世紀までに発達したウエセックス方言（ウエストサクソン方言）は一種の公的標準書き言葉となり，「アングロ・サクソン年代記」や「ベーオウルフ」に使用された（Knowles, p. 45）。

中英語（Middle English）

1066年のノルマン征服以後，フランス語（Anglo-Norman ）がイングランドの貴族の話し言葉となり，ラテン語が主な書き言葉として採用された。英語は下層階級で話されていたが，書きことばの伝統は崩壊し，英語で書かれた記録はわずかしか残っていない。約300年間用いられたフランス語は14世紀半ば以後次第に英語に取って代わったが，英語は宗教・政治・法律・学芸分野，特に法律用語に借用された。この英語はチョーサー（Geoffrey Chaucer?, 1340~1400）の英語に見られる。

1385年までにはオックスフォードの小学校教師の努力で，イングランドのすべてのグラマー・スクールでは英語で学習が行われるようになった（小野, p. 96）。グラマー・スクールとは古くから発達したラテン語教育を主とした文法学校であった。1944年教育令によりステート・スクール（公立中等学校）にはテクニカル・スクール，モダン・スクール並びにグラマー・スクールが導入され，小学校から中等学校へ進学するには１１歳で試験を受けて，試験の成績によってこれら３種の学校に生徒が振り分けられた。前者２学校に対して，グラマー・スクールは成績が上位の生徒が進学する特権階級のための伝統的な公立学校であったが，1960年代に労働党によりこの制度が廃止され，全てのステート・スクールは綜合制中等学校に変わることになった。

中期英語にはフランス語の他に，ラテン語，ギリシャ語，オランダ語などの外国語も借用されている。各地の英語諸方言の中で，東南部方言（East Midland）が中英語の標準英語となった（小野, p. 93）。

1476年にキャクストン（William Caxton, 1422~1491）が導入した印刷機は書かれたテキストの入手を大幅に可能とし，印刷技術はルネッサンスと宗教改革に結びついた16世紀の大変動に媒介の働きをした。この頃から学者はラテン語の代わりに英語で書くようになり，多くのラテン語が英語に借用された。16世紀末，シェークスピア（Shakespeare, 1564~1616）の時代に英

文学が栄えた。1611年に英訳『欽定訳聖書』が刊行された。ノルマン征服以後は，全国的標準と考えられるような英語の方言はなかったので，中英語は自然な方言のバライエティー（変種）の形で提示されている。

近代標準英語（Modern English）

近代標準英語はチョーサーの時代まで辿ることができるが，長い間綴り，単語の用法，英文法の詳細で一定していなかった。1660年，チャールズ2世の王政復古の後に，言語を統一することに関心がもたれた。1712年，スウィフト（Jonathan Swift, 1667~1745）はこのためにアカデミーの設立を提案したが実現せず，何が標準英語に含まれるべきかは学者にまかされた。1755年のジョンソンの辞書（Samuel Johnson, A dictionary of the English language）は綴りを標準化し，語の意味の固定化に役立った。1762年のラウスの文法書（Robert Lowth, A Short Introduction to English Grammar）は英語構造の説明として最も有力であった。ラウスは「間違っているのは言語ではなくて習慣で，正しいものを示す以外に，まちがっているものを指摘することによって」説明することが文法学者の務めであると論じた（Knowles, p. 155）。

1760年代から英語の発音の標準を定めることへの関心が高まった。1791年のウォーカー（John Walker）の辞書には音声的に漠然としているが標準的発音があり，ロンドンと関係のある人々により話されているという点で，この辞書は最も影響力があった。ウォーカーの考えはヘンリー・スウィート（Henry Sweet）によってより明確となった。

標準英語の成文化：ジョンソンとラウスの辞典，1770年のロバート・ベイカー（Robert Baker）の慣用法の書物「Reflections on the English language」（Kowles, p.151），英語史解釈，古い言語遺産の出版，特にThe Oxford English Dictionaryによる英語の歴史的集成は，標準英語の成文化に寄与した（Knowles, p.174）。

英語の「正しさ」はスコットランド，アイルランド，独立したアメリカでも，少なくともイングランドと同じ位求められた（Kowles, p. 156）。共通標準語の使用は社会的に見れば結合力があり，最悪の場合でも中立的である「標準的」（standard）を「正しい」（correct）と混同したことで新しい種類の標準，すなわち一般に達成できない容認可能（acceptability）な標準を作りだした。その結果，人々の読み書きの技能，英語力，社会階級，知能までも，慣用法のしきたりに一致する程度によって計られるようになった（Kowles, 158）。近代標準英語は古英語の1方言から出たのではなく，まず北部，西部およびケント方言の形が豊富に混じったイースト・ミッドランド方言から出ている（Kowles, p. 14）。

標準発音

標準発音の発達は，英語全体についてはスウィフト（Jonathan Swift, 1667~1745）から始まり，特に発音についてはシェリダン（Thomas Sheridan）から始まる。スウィートは彼自身の話し言葉を記述して，それを階級方言といった（Knowles, p. 184）。発音の新しい標準は，音声学の情報源を利用して大衆にはとうてい到達できないような仕方で正しい発音を定義した（Knowles, p.183）。1930初期までに，イギリスの音声学者たちは英語の標準化された部分に発音を加えていた（Knowles, p.186）。

標準発音が詳細に記述されたのは，今世紀になってからダニエル・ジョーンズのRP「容認英語」で，これは学校教育（ステート・スクールでは1988年まで）で使用され，1920年代に放送のための標準としてBBCによって採用された。

2) 階級・地域の英語

上流知識階級の言語

チャールズ2世の王政復古からアンの死までの時代は，英語の標準化において重要な過渡期であった。英語の「正しさ」に対する信仰は言語を統一しようとする意識的努力に刺激を与えた。18世紀末までには標準書き言葉英語の形はほぼ現代の形に固定していた。14世紀以来，社会的勢力とテクノロジーの結合は全国民が同じ書き言葉を採用することを保証し，1660年以後

の1世紀の間に英語の標準化は北ウェールズであれ，教会の庶務係であれ，遠近，職業の種類に拘わらず進展したが，これは権威主義の押し付けと言える。1660年以前には英語に対する態度は，あらゆる社会階級と背景の人々に共有され，反対され，その分割は垂直的であった。しかし1660年以後は，英語の純粋な形を確保して固定する必要について諸政党は同じ信念を共有し，言語における分割は社会的に優れていると考えられる人々と，劣っているとみなされる人々の間の水平的なものになった（Kowles, pp. 147~148）。

クイーンズ・イングリッシュ

クイーンズ・イングリッシュは，イングランド南部の教養ある人々の間で話される標準的な正しい英語とされている。1860年以後，正しくない英語を労働者階級の英語とすることが多くなり，教育ある人の慣用法が中産階級の英語と同一視されて，これが国民にとって自然な標準英語と断言され，さらに王族の地位にまで高められた。1864年にヘンリー・アルフォード（Henry Alford）は彼の著書「The Queen's English」で，「クイーンズ・イングリッシュは初期の居住者のようなでこぼこ道を長い年月をかけて平らにし，固め，広げることに努力し，この帝国の国土の思想とスピーチの偉大なハイウエイとなった」と，英語の進歩をハイウェイに例えている（Knowles, p.187）。

ブルジョワの英語

エリザベスの時代には，宮廷の用法が英語全体のモデルとして主張された。標準語を確かめることは基本的に中産階級の仕事になった。19世紀から大衆教育が導入されるまでの200年間，発展中の大都市圏に住むふつうの人々は，中産階級の標準英語を使うようにはなっていなかった。(Kowles, p.149)

労働者階級の英語

19世紀後期から，はっきりと悪い，正しくない英語といわれるものと，教育の失敗とが結びつけられるようになった。1920年までには，労働者階級には重大な言語欠陥があるということが主張され，労働者の英語の用法は正しくないとされた（Knowles, p. 180）。

首都ロンドンの英語

ロンドン英語は宮廷で使用される言語で，ロンドンに住む一般の人々が使用する英語とは著しく違っていた。18世紀までには，ロンドン英語は英語の発達において長期間確立した支配的役割を持っていた。書き言葉の場合，ロンドン英語と標準語を区別する必要はない。話し言葉としての英語が威信をもつにつれて，ロンドン英語は国内の他の地方の話し言葉に影響を与え始めた（Kowles, p. 158）。

地方の英語

18世紀以前は，英語を話す人々の大多数は，初期アングロ・サクソン定住者の方言から発達した地元の田舎方言を話していた。18世紀になると，都市の急速な発展により田舎からの新来者は多種多様な方言を話していたが，その相違は失われ都市では田舎と関係のある独自の等質的方言であるリバプール，ランカシャーなどの都市方言が発達した。社会的・技術的変化，交通手段などで，新しい流行を含むロンドン英語が地方都市に，さらに地方都市方言が双方に影響しあった。どの都市でもロンドン英語は労働者階級より中産階級で採用された。人々の話し方を統制しようという意識的な試みと18世紀の支配的な考えにより，地域的方言はロンドンの純粋な英語の堕落と解釈された。

3) 英国におけるイングランド以外の英語

英語がイングランド以外に広がり始めた頃には，印刷技術により書き言葉はすでに現代の標準語に近づいていた。話し言葉の場合，その普及に必要な技術がまだなく，ロンドン英語の影響はイングランド国内ですら上流階級に限られていた。その結果，元植民地の最初の定住者が話していた英語から，多くの権威ある英語のバラエティが発達した。

スコットランドの英語

スコットランドの英語，Inglis，後にScotsは，中世に記録の言語としてラテン語を使用し，1295年の古い同盟（Auld Alliance）の影響によって，イングランドと同じ種類だが異なる形のフランス語を借用した点で，イングランド英語と異なる。スコットランド英語は，14世紀後期，イングランドとほぼ同じ時期に，書き言葉として‘Scottish Chaucerians’によって文学語として使われ，16世紀までには，英語と平行して書き言葉として発達していた。

スコットランド英語は印刷技術が遅れていたためにロンドン英語に比肩できず，読み書き能力の普及に影響力のあった訳聖書「ジュネーブ聖書」は，したがってロンドン英語で書かれていた。1603年ジェイムズ6世がジェイムズ1世としてロンドンに移ってから，スコットランド英語の威信は衰え，スコットランド英語は17世紀の間にスコットランド紳士階級の書き言葉に加え，話し言葉もイングランド化された。1707年の連合法まで，ロンドン英語がグレート・ブリテンの公用語として使われた。18世紀，特に1760年以後，スコットランド英語の話し言葉と書き言葉における誤り，アクセントや発音に堕落した方言が指摘されている（Kowles, pp. 162~163)。

スコットランド方言はごく一部の地域で話されているにすぎず，大半の地域では英語のスコットランド方言（Scottish dialect）が話されており，公用語としては‘Queen's English’が使用されている（小野，p.338)。スコットランドにおいて，国際的流布の目的の文書はロンドン英語の方向に変化しているが，スコットランドではスコットランド英語の形の文書の割合が高い（小野，p. 164)。RPの影響はグラスゴーのケルヴィンサイド（Kelvinside）とエディンバラのモーニングサイド（Morningside）の気取ったアクセントの特徴に見られるが（小野，p. 164)，RPの採用にまでは到っていない。

アイルランドの英語

ダブリン周辺の古いノルド人定住地，ペイル（Pale）にアングロ・ノルマン人が定住した12世紀から，土地言葉としてのアイルランド語が発達した。イングランドと同様に，14世紀半まではラテン語とフランス語がイギリス人の行政の言語であった。1366年のキルケニ法は英語の地位を守る目的で，アイルランド語の使用に反対した。古い方言の残りは19世紀まで辿ることができるが，英語使用は次第に衰えた。

今日アイルランドで使われている英語は，ペイルの中世の英語に由来するものではなく，16～17世紀にイギリス政府の政策として移住を奨励された，イングランドとスコットランドから来た定住者が導入した。アイルランド語の書き言葉は，常にイングランドの英語とほとんど区別できなかった。イングランド各地から来た定住者は，多様な話し言葉のバライエティをもたらし，それが今でもアイルランドの様々な地方の言葉の特徴をなしているが，もとの言語から比較的均質な方言が出現した。アルスター北部で話されるアルスター・スコッツは，スコットランドからの定住者の話し言葉を今でも反映している。これより南，例えばベルファストでは，イングランド北部の影響が見られ，エリザベス朝英語が特徴である（Kowles, p. 164)。

アイルランド語の使用は，アイルランドが1800年の連合法により編入され，その後イギリス政府への反抗として急激に衰えた。アイルランド共和国の独立の時には，英語はすでに支配的言語であった。共和国はダブリンの教育のある人々の話し言葉に基づいた話し言葉英語として独自の英語を発達させたが，それはイングランドで確立されつつあった容認英語（RP）とは異なる。

イギリスでは300以上の方言が分類されている（田中，1994, p. 156)。

Ⅱ　英語圏の標準英語

英語を母国語とする国では，イギリス英語からその土地の言語変種の威信が増した。

1)　アメリカの英語

英語は最初，1497年ジョン・キャボットによってアメリカのニューファンドランドにもたらされた。最初の入植者は主としてイギリスのイースト・ミッドランド地域からであったので，方言混合は比較的均質的な言語であった。これがアメリカの話し言葉にほとんど地理的・社会的方言の言語変種がない理由であり，また入植者の英語がイングランドで優勢であったことから，アメリカ英語が「よい」英語である証拠と解された。アメリカ英語が「純粋」(purity) であるという最初の主張は1724年であり，Cassidy (1982, 187) は独立後アメリカ英語はイングランドの英語より優れていると主張した。例えばノア・ウエブスター (Noah Webster, p.166) はアメリカ英語は世界で最も純粋で，言語変種が少なく，言語の画一は政治調和に重要である，と述べている。しかしながら，アメリカの急進的思想家はイギリス英語の権威に挑戦しながら，イギリス人の言語の「正しさ」の問題に対する態度を当然と考えていた。

アメリカ英語の言語的独立は，例えば語彙の綴り字改革でhonourなどの語は[u]を落としてhonorとシンプル化したり，新しい語彙を用いた。発音では，単語の綴りの[r]が母音の後に出るとき，発音されるかどうかである。例えば，parkが[park]となるか，[pa:k]となるかの違いである。[r]を発音するのは中西部方言，しないのは南部方言と東部方言である。南部方言は母音を鼻にかけて[r]を引き延ばす。東部方言は口を閉じかげんの中間の音である (田中，1994, p.239)。

アメリカには日本のような標準語がない。中西部の方言でGeneral American (一般米語) ということばがよく使われる。開拓者が東海岸から西部へ移動したように，いくつかの方言も東から西への流れを示している (田中，p.156, 1994)。更に，アメリカ英語にはあまり地域差がない。住民が世代から世代へとたえず移動して，言葉の混合があったからである。アメリカには大まかに発音によって3つの変種，すなわち方言を区別できる。これらを区別しているのは発音の違いである。ニューイングランドの話しぶりはイギリス英語に近く，南部のアメリカ語は「drawl」と呼ばれる音節を引き延ばすのが特徴である。(Mosse, Fernand, p.236) アメリカの方言は大まかに北東部ボストンを中心とする東部方言，バージニアからテキサスにかかる南東部の南部方言，中部一帯から西部に広がる中西部方言に区分される。

アメリカの方言には地域方言と社会階級が結びついていない。標準語がなく，多民族と多言語が混じり合ってきたので，標準語に直すこともなく，地域方言をあるがままに受け入れる寛容な態度がある。ジョンソン元大統領は南部方言，ケネディ元大統領は東部方言，フォード元大統領は中西部方言を示していた (田中，p.156, 1994)。

2)　オーストラリアの英語

オーストラリア大陸はイギリスの航海探検家ジェームズ・クック (James Cook, 1728~1779) によって1770年に探検され英領となった。1788年イギリスの囚人流刑地として第1回の移住者はシドニー (Sydney) 付近に定住した。1901年に6州から成る連邦を形成し，1929年英連邦自治領 (the Dominion) となり，1931年にイギリス連邦 (the British Commonwealth of Nation) に加入した。

1868年に流刑が終了するまで168,000人の囚人が送り込まれ，彼らのイギリス各地の地方方言が入ってきた。オーストラリア英語にはイングランド，スコットランド，アイルランドなどの方言が多く，これに含まれるかなりの数の原住民の単語の多くは動植物名である (小野，p.342)。オーストラリア英語の発音は，その母音組織によって，ロンドンの方言 (cockney) の話し方を連想させる。

3)　ニュージランド英語

ヨーロッパの捕鯨者と貿易業者が1790年にニ

ュージランドに定住し始め，キリスト教宣教師が1814年頃からマオリ族（Maori）に宣教を始めた。ニュージランドは1840年にマオリ族とイギリス君主との条約（Treaty of Waitangi）によりイギリスの植民地となった。ヨーロッパからの移民が急激に増加し，ニュージランドのアクセントの出現が顕著になった。多くの人々の英語に明確なイギリス英語の影響が見られる一方，明確なニュージーランドの発音の使用とニュージーランド英語にマオリの語彙の増加が見られる（Crystal, p.35）

Ⅲ　国際補助語としての標準英語

1.　標準英語の定義

ウエブスター（Noah, Webster, 1758~1843）は標準英語の定義として下記の4点を挙げている。

1) 学校で教えられる英語である。

2) 全国的に社会共通に用いられ，言葉使いが正用法（reputable）の英語である。

慣用法（正用法とも訳される）とは一般的に，音声，言語，文字言語の双方にに関して，その言語社会（speech community）で通常用いられている諸形式を指すが，あいまいさをもつ言語である（田中，1988, p. 705）。例えば，他人の不正確な言語を扱った書物は文法と語彙の問題を発音，綴り，句読法，文体ともごたまぜにする傾向があり，この言語的ごたまぜが慣用法である（Knowles, p. 156）。

3) スペリング（spelling），文法（grammar），発音（pronunciation），語彙（vocabulary）に関して実質上画一的であるが地域差（regional differences）を無視せず，教養ある人々の公式，非公式のスピーチ（speech）およおび文書における慣用法（usage）で適切に確立された英語で，英語が話され，理解されるところはどこであろうとも容認され，広く認められた英語である。

4) 一般的な英語の辞書にあるすべての語句が，俗語（slang），なまり（dial），廃語（obs），生活史（biol），スコットランド英語（Scot），などのレッテル，表示，符号（label）で限定されていない英語である。（Webster's Third）。

しかしながら，上述の3）でウェブスターの標準英語の定義の発音が画一であるとする標準英語の概念について，クァーク（Quirk, p. 37）は発音は変幻自在に多様であり，個人個人でも異なり，完璧に画一な発音に達することは困難であるから，少なくとも適用されないとしている。

2.　標準語

言語変種（Variety）とはある言語社会において，音声・語彙・文法面で他と区別できる特徴を持つ一組の言語形態をいう。したがって，言語変種は，判断や感情を想起させない中立的・客観的な用語で，ある言語の標準語や方言，ピジン（Pidgin）・クレオール（Creole）・古典語・人工語（Artificial language）・形式文体・非形式文体・専門語・学生用語などのいづれをさすこともできる（田中，1988, p. 708）。標準変種は標準方言（standard dialect），標準言語（standard language），標準（standard）を意味し，標準語は本来は特定の方言である(田中,1988, p. 25)。標準語は一般に方言に対すると考えられ，その国の政治・経済・文化の中心地で使われる標準語は言語変種であることが多い。

標準語はある国において，ある地方の方言（direct）が，いろいろな力関係で勢力をもち，全国的に普及し，全国的に用いられ，洗練された規範的なものとして広く認められる言語で，全国的共通語（Common Language）となることが多い。フランス語やイタリア語などは，アカデミーが，発音・語彙・語法・借用語（Loan Word）などに関する詳細な基準を制定して，国（家）語としての標準語を勧告している(田中,1988, p.630)。イングランドとウエルズの場合，ステート・スクールにおける標準英語に関する基準を1988年教育令で指示している。日本語の場合，国で制定された標準語はなく，全国に普及した共通語（Common Language）と考えられる。

標準語は，主に書き言葉として法令・公文

書・教科書・新聞などに用いられるが，ラジオやテレビのニュース，公式の場における講演などにおいても使われ，いわゆる「正しい」または「よい」言語と考えられている。標準語はある地域が政治・経済・文化的に優勢になったために，たまたまその地域で話される変種が他の変種よりも優勢となって規範化されるので，社会の変化につれて標準語も変わることがある。

3. 英語圏の標準英語

すべての英語圏の標準変種（Variety）を包括した総称として，時おり標準英語（Standard English）が用いられる。英語圏の標準変種として，例えば，イギリス英語の標準変種は標準イギリス英語（Standard British English），アメリカ英語の標準変種は標準アメリカ英語（Standard American English），オーストラリア英語の標準変種は標準オーストラリア英語（Standard Australian English）と呼ばれる。

標準変種は国のどの地域で話されるかによって，例えば標準イギリス英語は標準イングランド英語，標準スコットランド英語などのように，各地域に特有の標準的な話し方が見られる。アメリカ標準英語についても，東部方言，中西部方言，南部方言など，それぞれの地域における各地域に特有の標準的な話し方が見られる。中西部方言がGeneral American（一般英語）として，放送によく使われる（田中, 1988, p.156）。

イギリスの容認発音が階級方言であるのに対して，アメリカの容認発音というべきものは，中西部を中心とする地方方言である。英語圏の英語，例えば標準アメリカ英語は標準イギリス英語の方言であるとされている（Svejcer, p. 15）。

4. 国際補助語（International Auxiliary Language）

英語の権利

1945年後のイギリスの勢力衰退と世界的規模のコミュニケーション・テクノロジーの発達により，英語の変化に影響を及ぼす力が，イギリスの威信あるグループから国境を越えた商業組織へと移り始めた。イギリスの軍隊の植民地からの撤退と植民地の独立につれて，英語の権利は超大国のアメリカ英語となり，コミュニケーション・テクノロジーは国際語の必要を作り出し，国際語としての英語の地位を維持し，高めた。英語使用者の多くは英語の母語使用者ではない。英語は今や標準イギリス英語から，世界の英語に代わりつつある。

英語話者の増加

ゲルマン方言から発展した英語は，今や一つの世界語であり，2億の英語話者の母語であり，他の何万という人々から読まれ，話され，学ばれている。この世界的な拡大はすでに完成した言語となっていた19世紀に始まっている。発音と綴字がほぼ同じで，多くの特有語法の言いまわしも可能で，きわめて柔軟で，絶えず新しい寄与により富んでいく媒介であり，第1流の文学の伝達手段，芸術家の言語，実務や現代技術の言語，外交用語である英語は，20世紀半ばにその頂点に達しており，国際補助語に公式になれる見込みがある（Mosse, p. 240）。しかし，これはイギリスだけの言語（イギリスの容認標準語・容認発音が優勢標準変種）ではなくなっている。

ウェブスターの「標準英語」の定義によると，どこで話される英語でもその地域の標準英語が認められることになる。世界の多数の国々の学校教育に「標準英語」が導入されている。この「標準英語」は，国際語，世界語，グローバル言語などと呼ばれ，国際補助語として認められてきている。

未来の英語

英語は今世紀の間に，大英帝国の言語から国際的なコミュニケーションの言語に変わった。古いコンテクストでは完全に良識的と思われた信念が，すでに奇妙で時代遅れに見えている。英語を支配するのは英語のネーティブ・スピーカーではなく，東アジアの言語ネーティブ・スピーカーであろうと予測できる（Knowles, p. 200）。

今後，国際補助語としての英語の役割がますます増大していくにつれて，共通語としての英語の姿も変化していくと考えられる。標準語は社会の変化につれて，更に地方方言や社会方言などの影響を受けて変容し，「容認標準語」も「修正標準語」ともいうべき流動的なものになっている（田中，1988, p. 630）。

おわりに

英国における標準英語は英国特有の書き言葉および発音であり，文法，語彙，意味，発音，特に標準発音はRP（容認発音）は他の英語圏のそれと異なる。更に，標準英語の成立過程から，英国の標準英語は一般の人々が使用している英語ではなく，特有な階級の英語である点でも他の英語圏の標準語とは異なる。

この標準英語は学校で教えられ，社会でも容認されており，専門職においては不可欠な条件である。しかしながら，1988年教育法により，学校教育（公立学校）における標準英語の発音がRPでなくとも他の英語圏の標準発音でよい，となったこと，および英国内における社会の変化と国際補助語としての英語の使用が世界で増大したことによって，英国標準英語は大きく変化している。

学校で使用される英語として，主として上流・中流階級の子女が就学する独立学校では従来通りRPが教えられているが，労働者階級の子女が多く就学するステート・スクールでは，標準容認発音であるRPは明らかに減少していくであろう。

社会において，BBC放送では労働者が使用する英語，地方の英語，英国以外の英語圏の英語，外国人が使用する英語など標準英語やRP以外の英語も特定の番組に使用し始めている。他方，言語テクノロジー，コンピューター，国際的な商業に関する英語が標準英語に影響を与えている。更に，イングランド東南部でロンドン民衆の話ことばを取り入れた，多層の人々によって使用され初めている河口域英語が出現している。

近代標準英語の成立を歴史的に概観すると，それは6世紀，アングロ・サクソン人の英語（古英語）に始まり，18世紀末までに形成された。1385年までにグラマー・スクールでは英語（中英語）による学習が取り入れられた。言語統一への関心は1660年頃から，発音への関心は1760頃から始まった。1930初期までに，英語の標準化された部分に発音が加えられた。標準発音が詳細に記述されたのは，今世紀になってからパブリック・スクールの発音をモデルとしてダニエル・ジョーンズ（Daniel Jones）によるRP「容認英語」であった。RPは学校（ステート・スクールでは1988年まで）で使用され，1920年代にBBC放送に採用された。

イギリスでは300以上の方言が分類されており，標準英語は東南部の方言であり，階級方言でもある。現在の標準英語に到る階級と地域により異なる英語について概観してみる。クインズ・イングリッシュはイングランド南部の教養ある人々が話す標準的な正しい英語とされている。18世紀以降，教育ある人々の慣用法が中産階級の英語と同一視されて標準語として，王族の地位に高められた。ロンドン英語は宮廷で使用されることばで，18世紀まで支配的役割を持っていて，話しことばの発達と共に地方に影響を与え始めた。1707年までロンドン英語がGB（大英帝国）の公用語であった。他方，労働者階級の人々が使用する英語は，1920年頃には正しくない英語とされた。

地方の英語に関して，アングロ・サクソン英語の方言，都市方言が発達し，ロンドン英語と影響しあった。ロンドン英語は中産階級に採用され，地方方言はロンドンの純粋な英語の堕落と解釈された。ブルジョワの英語としてエリザベスの時代には，宮廷の用法が英語全体のモデルとして主張された。

スコットランドにおいては，イングランド英語と同種のスコットランド英語は17世紀にイングランド化された。現在，スコットランド方言は一地域で使用され，大半の地域では英語のスコットランド方言が使用されている。公用語にはクインーズ・イングリッシュ，国際的流布としてはロンドン英語が使用されており，RPは2，

3の地域で使用されている。アイルランドにおいては，アングロ・ノルマン人がペイルに定着した12世紀から発達したアイルランド英語（ペイル中世英語）は衰え，英語はイングランド，スコットランドからの定住者（16~17世紀）が導入した。イングランド英語から多様なことばのバラエティが生まれ，ベルファストではイングランド北部，エリザベス朝英語が反映している。アルスター北部で話されるアルスター・スコッツは，スコットランドからの定住者の話し言葉を今でも反映している。アイルランド共和国では教養ある人々の話し言葉として独自の英語が発達したが，その発音はRPとは異なる。

英国の英語はこのように階級・地方によって大いに異なり，標準語は一般の人々が使用する英語ではない。

英語圏の英語として，イギリス英語はアメリカ英語，オーストラリアの英語並びにニュージランド英語として発展した。

英国の標準英語は特定の階級の英語である。国際補助語としての標準英語は，英語圏の標準英語に加えてその他世界の諸国の学校で教えられ，政治・経済分野においても使用され，情報技術（IT，Information Technology)の発達とその普及により，コンピューター言語もウエブスターの英語が主流であり，なべて一般の人々が使用している英語であることから，ウエブスターの標準英語の定義に基づいていると考えることは妥当であろう。英国の標準語はすでに少数の使用者であり，変化しつつある。他方，ウエブスターの定義に基づく英語は，その使用者数と使用諸国数の増加は云うまでもなく，使用目的も拡大している。英国における標準英語の今後の変化は興味ある課題であろう。

【参考文献】

Brumfit, Christopher ed., English as a Second Language in the United Kingdom, Pergamon Press Ltd., Oxford, 1985.

Burchfield, Robert (Edit.) The Story of English, BBC, London, 1986.

Crystal, David, The Cambridge Encyclopedia of Language, Cambridge University Press, New York, 1987.

Crystal, David, English as a global language, Cambridge University Press, Cambridge, 1997.

DEF (Department For Education), English in the National Curriculum, HMSO, London, 1995.

石黒昭博他，現代の言語学，金星堂，1996年

Graddol, David., Leith, Dick., Swann Joan, English History, Diversity and Change, The Open University, Routledge, London, 1996.

Graddol, David , The Future of English?, translated by K. Yamagishi, Copyright of Original Material by The British Council, 1997, copyright of Japanese Translation by Kenkyusha, 1999.

Halliday, M.A.K., McIntosh, A., Strevens, P., The Linguistic Sciences and Language Teaching, Longmans, London, 1964., Japanesse edition 言語理論と言語教育，増山節夫訳注，大修館書店

Hardy, Vanessa.（加藤恭子編訳），英語の世界，講談社現代新書，1996年

林栄一，小泉保編，頸草書房，言語学の潮流，1988年

Knowles, Gerry, A., Cultural History of the English Language, Holdder Headline Ltd., U.K., 1998, Japanese edition by Kaibunsha, Tokyo, 1999.

小野はやし，イギリス史概論，成美堂，1979年

Mosse, Fernand, 英語史概説，translated and published by 開文社，1963年

中島平三，外池磁生編著，言語学への招待，大修館書店，1994年

Pyles, Thomas & Algeo, John, The Origins and Development of the English Language, Harcourt Brace Jovanovich, Inc., Orlando FL., 1993.

Quirk, randolph & Stein, Gabriele, An Introduction to Standard English <The abridged edition of English in Use, First Edition by Longman Group UK Limited, London, 1990>, ed. by Terasawa Yoshio, Kirihara Shoten, 1992.

Smith, Neil & Wilson, Deirdre, MODERN LINGUISTICS, PENGUIN BOOKS, London, 1979, Japanese edition, 今井邦彦監訳，現代言語学，新曜社，1979年

Strevens, Peter, 英語教育の新潮流，東京書籍，1997年，(Peter Strevens, New Orientations In the Teaching of English, Oxford University Press, Oxford, 1997)

Svejcer, Aleksandr D., Standard English in the United States and England, Mouton, The Hague Germany, 1978.

田中春美他，言語学のすすめ，大修館，21版1994年

田中春美他編，現代言語学辞典，成美堂，1988年

Trudgill, Peter, Introducing Language and Society, Penguin Books, London, 1992.

Webster Noah, Webster's Third New International Dictionary, G. & C. Merriam Co., USA, 1981.